

命のバトン～想いを繋いで～

大阪府立園芸高等学校 バイオサイエンス科 2年 新井 心優

小学校5年、私の夢は産婦人科医だった。小学校の時、生命の授業で人が産まれるまでの数々の奇跡に感銘を受けた私は、出産という生命の誕生に携わる仕事に就きたいという夢を持つようになった。

そして私は、それ以来毎日学校の図書室に通い、生命の誕生についての本を読みつくした。そして私は出産が、正常な分娩だけでなく逆子だったり、破水したのになかなか産まれて来ず、難産になったり、高齢出産で、ハイリスクの出産になったりすることを知った。出産が、全て幸せな奇跡の連発だと思っていた私は、大きな衝撃を受けた。そして、生命の誕生には、ただ一つ同じものはないことを学び、私はその奇跡をこの手で取り上げたいと、産婦人科医師を目指すようになった。

そんな私が酪農家を目指すようになるまでには、たくさんの方との出会い、そして繋がり、思いがあった。

小学校6年、当時私が住んでいた神奈川県の小学校では、2泊3日で新潟の農家さん宅で民泊をさせてもらい、農作業を体験するという体験学習が行われた。民泊の農家さんは、米や野菜、果物を栽培している農家さん、そして酪農家さん宅があり、その中で酪農家さんはただ一軒だけであった。私は、その酪農家さん宅の民泊となった。

当日、私を迎えてくれたのは、元気な笑顔が印象的な酪農家さんご夫婦だった。

「今日から3日間おっちゃんとおばちゃんは、新潟のおっとうとおつかあだ!」と笑顔で温かく迎えてくれたことで、それまでの私の張りつめていた緊張がほどけていった。酪農家さん宅に到着すると、私達を早速、牛舎へと案内してくれた。そこには、白と黒の自分よりも何倍も大きな体をした牛がいた。その大きさに圧倒されていた私に、「触ってみい」と牛の背中を優しくなでながら酪農家さんは私に言った。私は恐るおそる自分よりも何倍も大きな牛の顔を覗き込むと、そこには優しい瞳をして、温かな眼差しでこちらを見つめている牛がいる。それは、私が牛を大好きになった瞬間であった。私が牛の体をなでると、牛は、その大きな体を寄せ、私にこすりつけてきた。驚いて酪農家さんを見ると、「なあに、甘えてるだけだよ」と言って笑った。私は、牛も甘えることがあるのだと、驚いた。そして、すりすりと甘えてくるその大きくて温かな瞳をした牛を私は愛おしいと感じるようになっていた。そして、酪農家さんは、牛を別の場所に移動させながら、「誰か乳搾りやりたいやつはいるか?」と私達に聞いた。私は、迷わず手を挙げた。そして一番バッターで私が選ばれた。私は、酪農家さんの指示に従い、手をきれいに洗い、消毒をし、牛の乳に触れてみた。すると、乳は想像していたより柔らかく、その手の感触からは、牛の温かな温もりが感じられた。私は教えられたとおりに

親指と人差し指で付け根部分をしっかりと閉じ、ゆっくりと搾ると、「ビューッ」と勢いよくミルクが出てきた。私は牛乳が牛の乳であることは、当然のことながら知っていたが、こうして実際に体験してみて、普段飲んでいる牛の乳がとても尊いものであることを感じた。そして、牛の搾りたての乳は、とても濃厚で今まで飲んだ、どの牛乳とも比べものにならないくらい美味しい、普段のパックで買っている牛乳とは全く違うものであった。

酪農家さん宅に戻ると、酪農家さんは、私達に、牛についてたくさんのこと教えてくれた。1日1頭の牛から30ℓ程度の搾乳ができること、そして、それは普段人の手ではなく、ミルカーという機械を装着して行っていること、そして、分娩してすぐにお乳を出す母牛もいれば、少ししか出さない母牛もいるということ、そして驚いたのは、牛はある一定の期間をあけて、常に妊娠していることだ。それまで、何も疑問に考えたことはなかったが牛も当然のことながら出産することで、乳を出していて、そして、その乳を出すために牛は繰り返し妊娠しているのだ。そして、子牛の出産も酪農家さんの大切な仕事の一つであることを話して下さった。特に、分娩の兆候などは、見逃してしまわないよう、日々の行動の変化を注意して観察していること、そして、妊娠についても発情周期をチェックし、優秀な雄の遺伝子を人工授精させて、妊娠を行っていることを話して下さった。牛は、乳が出るものと考えていた私は、牛乳が生産されるまでにこんなにもたくさんの命がかかわっていることを知り、大きな衝撃を受けた。そして私は、牛の妊娠、出産について興味を持つようになった。

そして体験学習を終え、自宅に帰ると私は母に、酪農家さん宅での様々な体験を話した。そして、私が大きな衝撃を受けた、牛の乳が生産されるまでについてを話した。私は、その中でも特に、人工授精という、生命を自らの手で作り出すという仕事にとても興味を持ったことを話すと、母は長い間、不妊に悩んで、不妊治療を受けたことを初めて私に話してくれた。そして、私が人工授精に興味を持ったことは、この時、偶然ではない、必然なのだと感じた。そして、生命は、当たり前ではないことを改めて感じた。私は、この時人工授精師になろうと心に決めた。

そして、私は現在、人工授精師を目指すとともに、大きな体をした温かなまなざしの牛とともに、幸せに共存できる酪農経営を目指している。そして、農業高校へと進学した。私が通う高校では、残念ながら牛はいないが、その中でも、農業の基本を学び、身につけることができるよう日々農業の実習に取り組んでいる。そして、農業クラブでは、現在、副会長として他校の資源動物科の生徒との情報交換や、農業クラブでのプロジェクトや意見発表など酪農に関する最新の技術や取り組みなどを学んでいる。

そして、春休みなどには、地元神奈川県にある片倉牧場さんのもとで勉強させてもらっている。片倉牧場では、飼育や作業の他にも、酪農と地域との様々な繋がりを学んだ。地域の豆腐屋から不要なおからをもらって混合飼料にしたり、製菓工場からカカオの殻を使わせて

もらったり、他にも、牛の足元に敷いているおが屑は地元の木工屋さんから譲ってもらったり、近隣の小学校からシュレッダーにかけられた屑をもらって使用している。そして、小学校へは牛の糞を堆肥として還元しているなど、地域での深い繋がりを学ぶことができた。私はこうした地域との繋がりを大切にし、目標とする酪農経営では、地域の子ども達に命の大切さを教える酪農教育ファーム活動を行っていきたいと考えている。

そして、牛乳ができるまでの様々な過程のなか、生命を感じ人と大地の繋がり、自然からいただく大切さを伝えていきたい。そして、また酪農教育ファームを受けた子ども達がこの命のバトンを繋いでくれると信じている。